母親の言葉の力

まだ生まれたばかりの赤ちゃんに話しかけても、わかるはずはありません。しかし、それは決して“むだ”な行為ではありません。そういう、一見“むだ”と見える行為によって、実は赤ちゃんは言葉の学習をしているのです。

おむつを換える時も、黙ってしないで、「ターちゃんはいい子ね、いい子ね」と声を掛けてやったり、「きれいきれいしましょうね」と話しかけてやることが、赤ちゃんにとっては、何よりも必要な“言葉の教育”なのです。

こういう言葉を、繰り返し繰り返し聞くことによって、赤ちゃんの大脳の左側の部分は発達していくのです。だから、無口のお母さんでは、赤ちゃんの大脳は発達せず、知能が伸びません。

アメリカの保育所の調査によりますと、保育所で預かっている一歳二、三か月の幼児に、毎日、十五分くらい、話を聞かせてやるグループとそうでないグループとに分けて、それを半年間続けたところ、毎日十五分ずつ話を聞かせていたグループの子供たちの方が、そうでないグループの子供だちより、ずっと知能が伸びた、という報告があります。

このように、三歳までの幼児の知能の発達には、母親か、あるいは母親に代わる人の話しかけが必要です。

また、早口の親に育てられた子供は、必ず早口の子供になります。乱暴な大声で話す親に育てられた子供は、やはり乱暴な大声で話す子供になります。

だから、親は、赤ちゃんの耳の届く所で話をする時には、乱暴な言い方を慎しみ、出来る限りやさしい調子で話すように心掛けなければなりません。

まして、赤ちゃんに語りかける時には、美しい声の発声練習のつもりで、出来る限り、愛情をこめて、やさしい調子で語りかけなければなりません。そういう親の努力が子供を立派な人間にするのです。